

世界経済危機下の ウクライナ経済

2009.1.28 服部倫卓

<http://www.hattorimichitaka.com>

数字で見るウクライナの経済危機

2008年終盤のウクライナの月別主要経済指標

	8月	9月	10月	11月	12月
国内総生産（前年同月比増減率、％）	10.9	5.5	▲ 2.1	▲ 14.4	
鉱工業生産（前年同月比増減率、％）	▲ 0.5	▲ 4.5	▲ 19.8	▲ 28.6	▲ 26.6
鉱業	2.3	▲ 1.2	▲ 10.0	▲ 32.1	▲ 20.1
エネルギー資源	4.2	▲ 0.1	▲ 0.2	▲ 6.8	0.2
エネルギー資源以外	0.3	▲ 2.3	▲ 20.6	▲ 60.2	▲ 42.4
製造業	▲ 1.1	▲ 5.3	▲ 21.1	▲ 29.0	▲ 28.3
食品、飲料、タバコ	▲ 3.5	▲ 5.5	▲ 10.9	▲ 8.7	▲ 4.9
軽工業	▲ 9.9	▲ 2.1	▲ 6.3	▲ 19.1	▲ 17.4
コークス、石油製品	▲ 4.9	▲ 22.3	▲ 43.9	▲ 11.6	▲ 6.2
化学工業	▲ 9.1	▲ 2.1	▲ 19.2	▲ 35.2	▲ 38.0
冶金、完成金属製品	▲ 8.6	▲ 17.0	▲ 35.6	▲ 21.0	▲ 42.7
機械	13.4	14.6	▲ 11.2	▲ 38.8	▲ 37.1
輸出総額（100万ドル）	6,724	6,705	5,674	3,723	
輸入総額（100万ドル）	8,157	8,415	7,584	5,269	
消費者物価（前月比上昇率、％）*	▲ 0.1	1.1	1.7	1.5	2.1
卸売物価（前月比上昇率、％）*	1.8	▲ 3.8	▲ 1.4	▲ 6.5	▲ 0.4
為替レート(月末、1ドル当たりグリブナ)	4.85	4.86	5.76	6.74	7.70

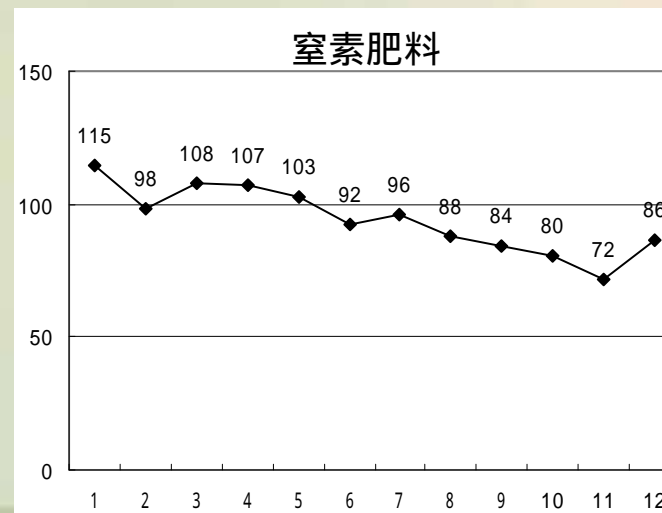
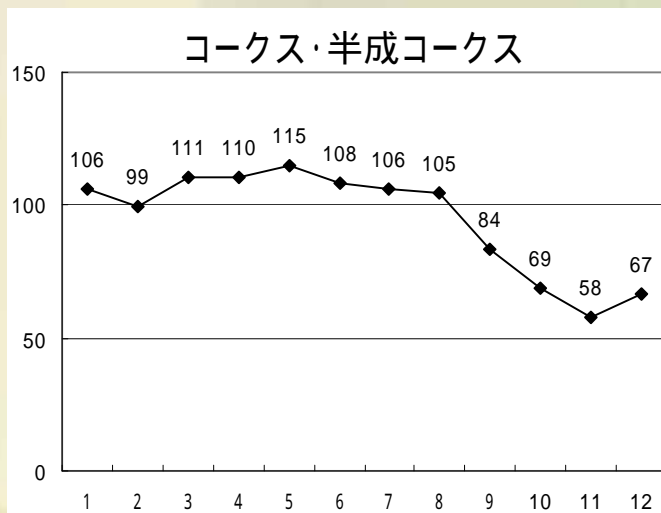
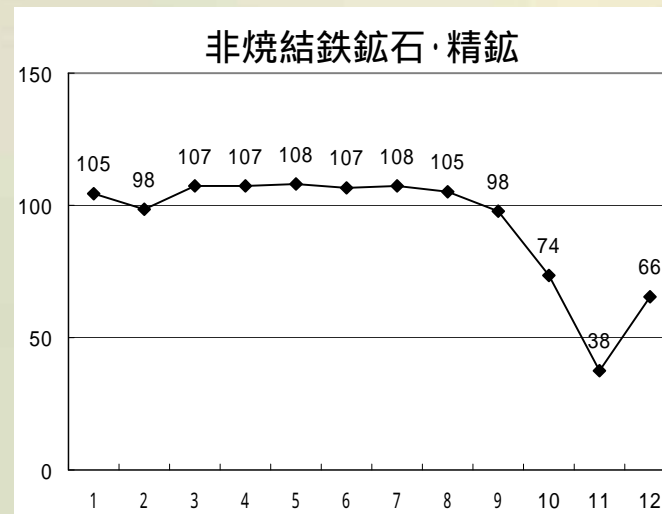
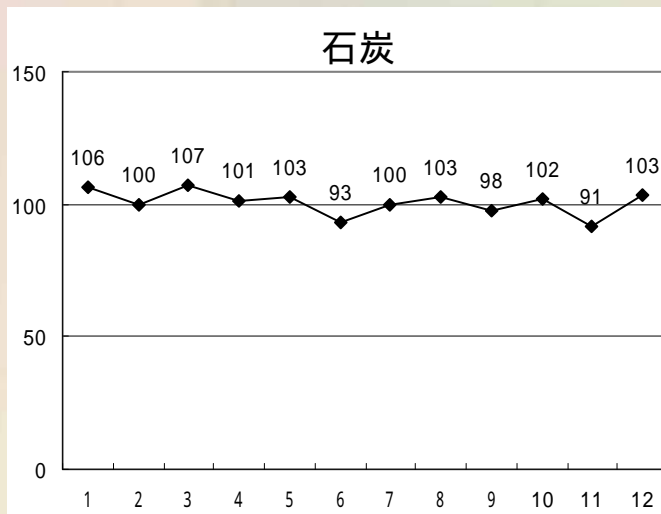
（注）* はデフレを意味する。

（出所）ウクライナ統計国家委員会。

- 8～9月頃から指標が悪化。2008年通年のGDPは前年比2.1%増だが、第4四半期は明らかにマイナス成長。とくに基幹鉱工業部門の落ち込みが大きい。
- ただし、生産落ち込みの底は11月であり、それ以降はごくわずかではあるが回復の兆しが見られる。
- 経常収支赤字の拡大、卸売物価の下落など要注意。

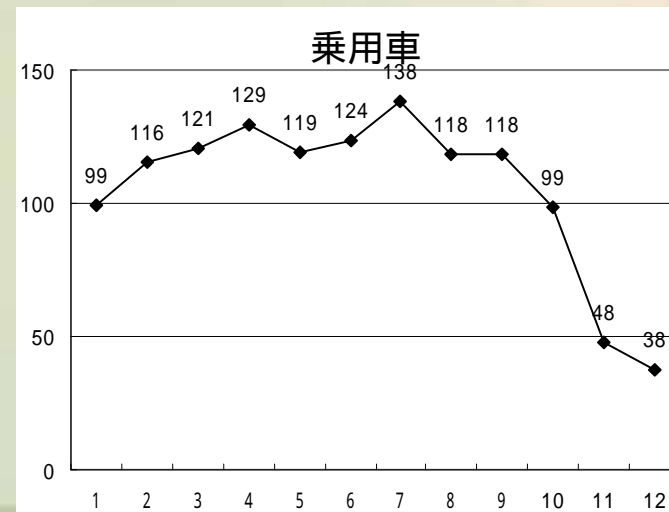
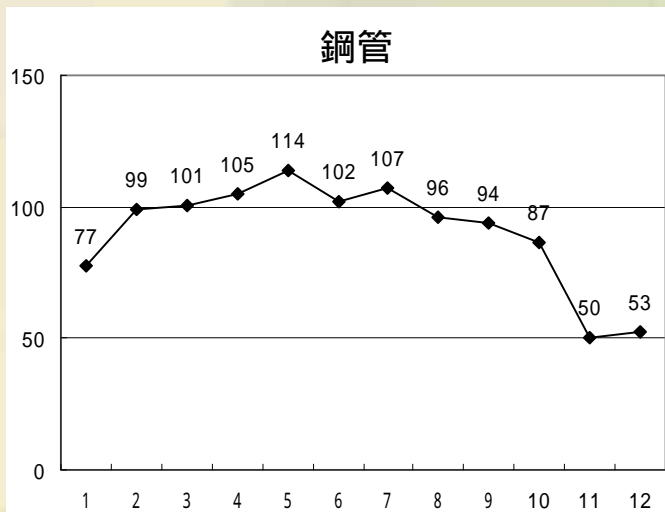
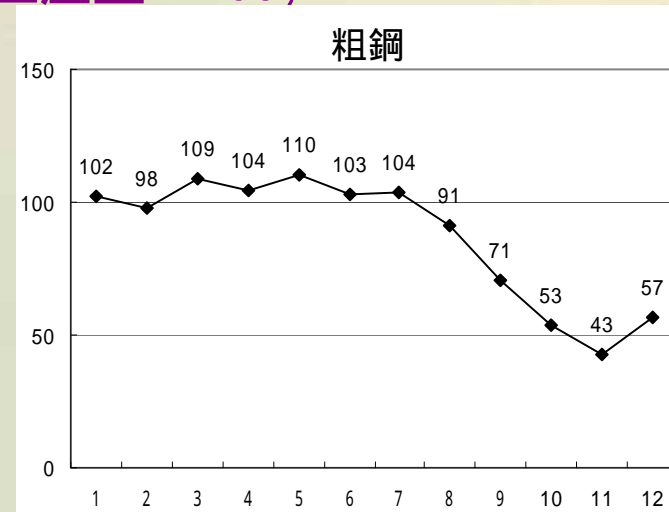
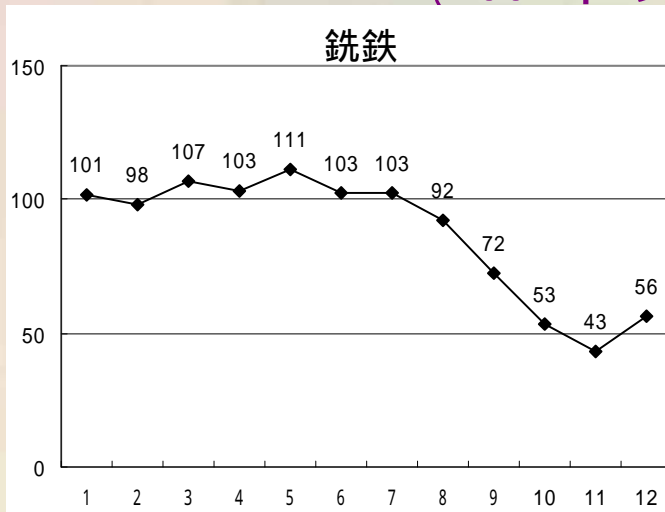
2008年のウクライナにおける 主要鉱工業製品の月別生産動向(1)

(2007年の月平均生産量 = 100)



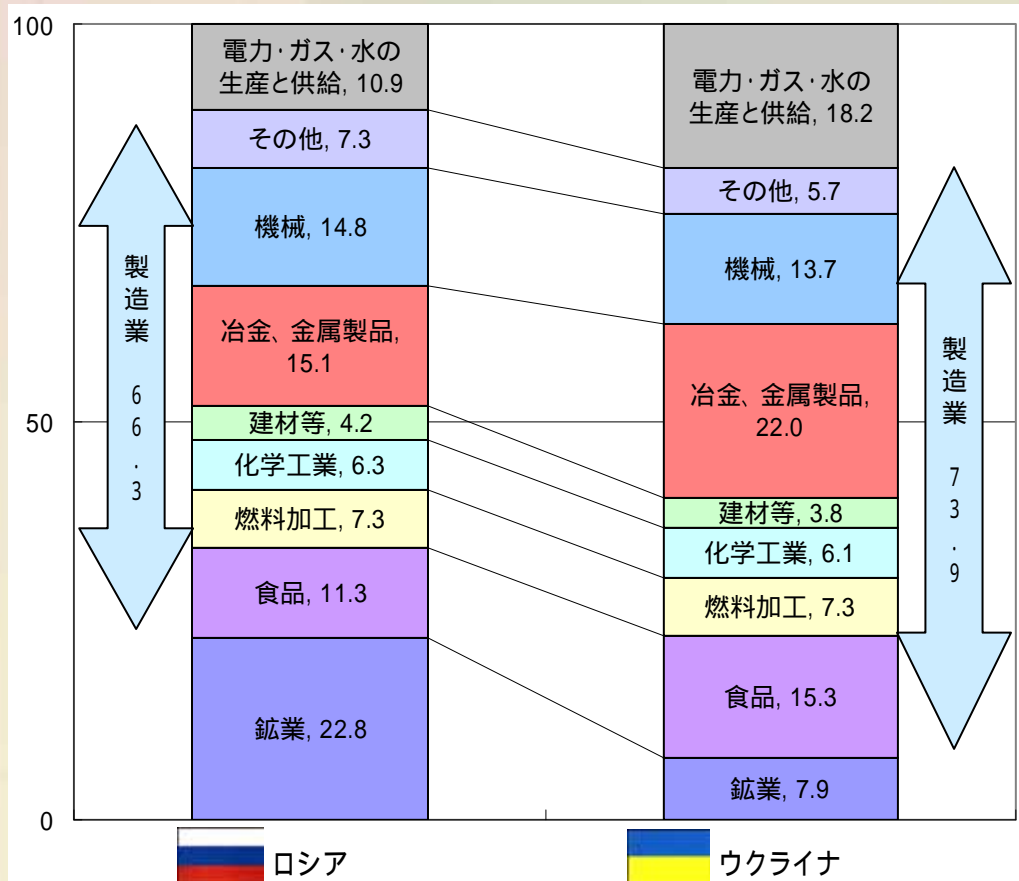
2008年のウクライナにおける 主要鉱工業製品の月別生産動向(2)

(2007年の月平均生産量 = 100)



ロシアとウクライナの鉱工業生産構造比較

(2007年、構成比%)



- ロシアよりもウクライナの方が製造業の比率が大きく、一見すると、エネルギー・資源偏重のロシアよりも高度な産業構造のようにも思える。
- しかし、ウクライナの基幹産業である鉄鋼、機械、化学は小回りの利かない装置産業であり、付加価値が低いというえに、原燃料多消費型。

鉄鋼生産国としてのウクライナの地歩

- ウクライナは2007年の時点で世界第8位の鉄鋼生産国で、世界シェア3.3%。また、日本、ロシアに次ぐ世界第3位の鉄鋼輸出国。
- しかし、世界の主要鉄鋼生産国中、2008年の世界経済危機で最も大きな被害を受けたのがウクライナ。2008年の粗鋼生産は前年比13.4%減で、主要国のなかで唯一、2ケタの減少。とくに10～12月の生産水準は、前年同期からほぼ半減。半分近い高炉が停止する事態。



ドネツク州のアゾフスターリ

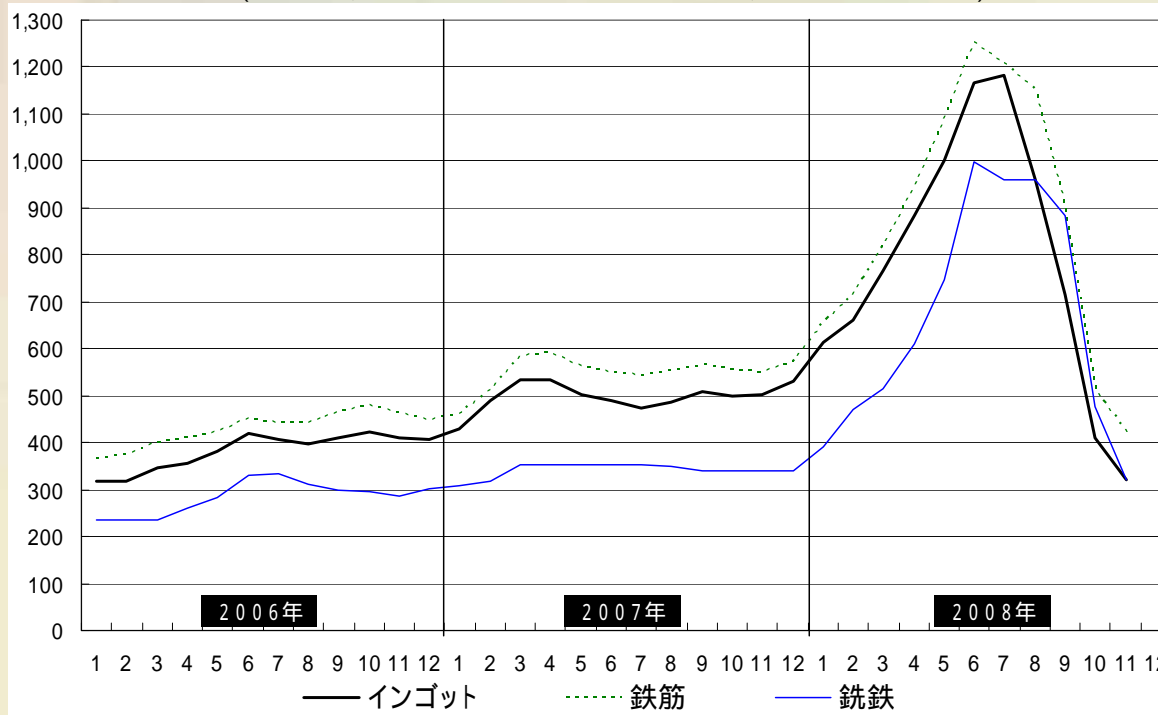
なぜウクライナ鉄鋼業の不振が際立つのか？

1. ウクライナ鉄鋼業は輸出依存度がきわめて高い。ウクライナで生産される鋼材のうち、7～8割が輸出に向けられているとされている。
2. しかも、輸出の多くは長期契約ではなく、スポット契約。それだけ、国際市況の乱高下に翻弄される度合いが、他国よりも大きい。
3. ウクライナの鉄鋼輸出は半製品が中心で、付加価値の低い構造となっている。スポットで半製品を輸出するというビジネスは、景気の良い時はいいが、いったん市況が悪化すると、脆弱性を露呈する。

鉄鋼国際市況の乱高下

鉄鋼の月平均輸出価格の推移

(CIS産、黒海・バルト海諸港FOB、1t当たりドル)

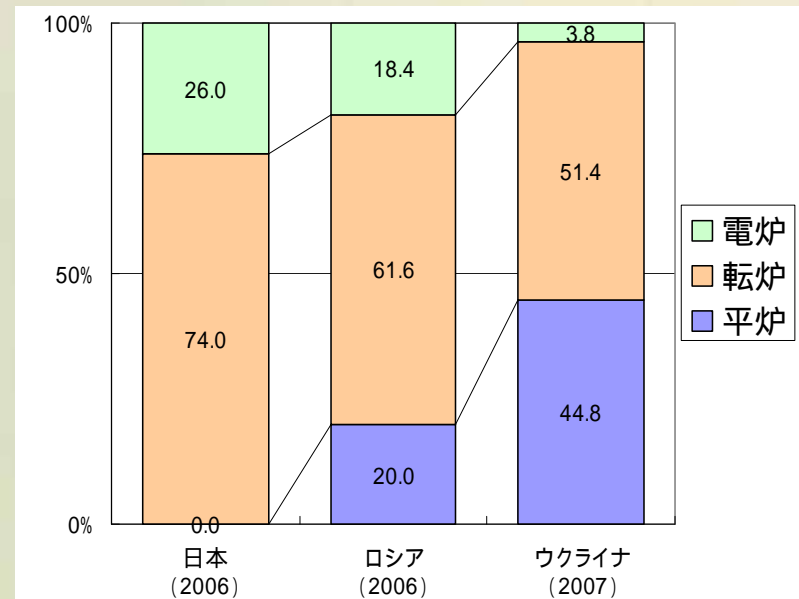


- 2008年に入って異常な急騰、夏には1t当たり1,000ドル超という歴史的な高値。実需に加え、投機的な側面も。
- 原燃料費も上昇していたが、鉄鋼価格はそれを補って余りある高騰を示していたため、ウクライナの鉄鋼メーカーはスポット輸出に精を出した。
- 8月頃に在庫がだぶつき始めたところに、9月のリーマン・ショック、需要が一気に冷え込み、ウクライナの各社は大幅な減産を余儀なくされた。

ウクライナ鉄鋼業の技術的後進性

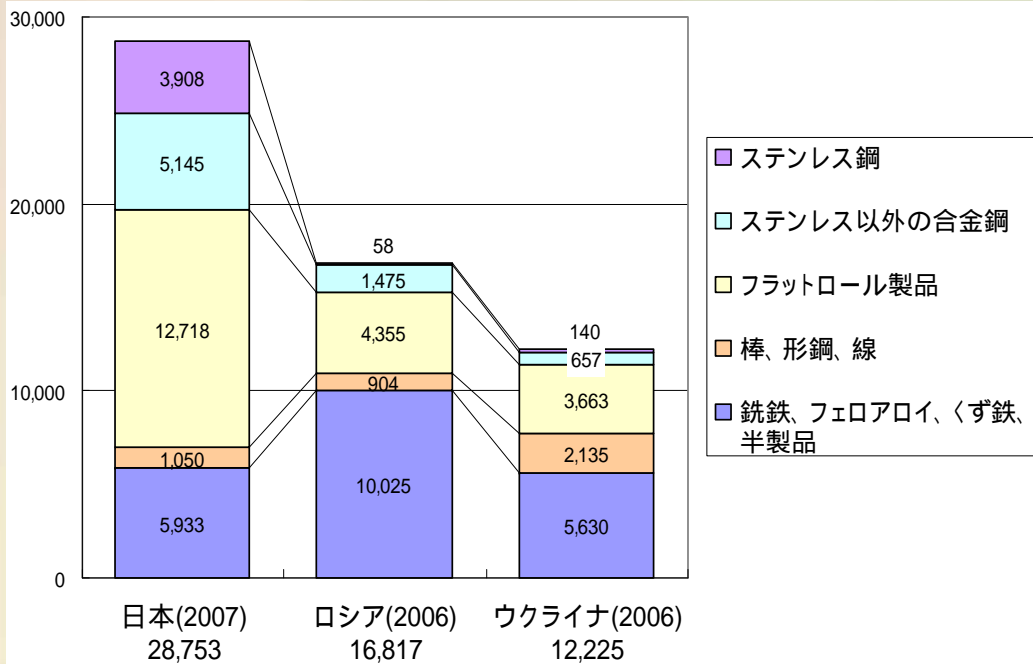
- ウクライナでは、前時代の遺物である平炉が、いまだに粗鋼生産の半分近くを占めている。
- 平炉は、生産性が低く、歩留まりが悪く、コスト高・エネルギー多消費であり、環境負荷も大きい。先進国はおろか、中国でもすでに廃棄された製法。
- ウクライナ鉄鋼業の技術水準は、先進国から30～40年遅れている。ソ連時代はひたすら生産量重視、ソ連崩壊から10年ほどは生き残るだけで精一杯、最近数年は世界的特需で低品質でも売れたため、近代化しないまま今日に至ってしまった。

製法別粗鋼生産
(構成比、%)



半製品中心のウクライナの鉄鋼輸出

世界3大鉄鋼輸出国の輸出構造比較
(第72類の輸出、単位は100万ドル)



- 左図は、概ね、上の品目ほど付加価値が高い。ロシア、ウクライナは付加価値が低い半製品（スラブ、ビレット、ブルーム）、銑鉄などが中心。
- 鉄鋼（第72類）の1t当たりの平均輸出価格は、日本：770ドル、ロシア：388ドル、ウクライナ：412ドル。

チャンスを逃したウクライナの鉄鋼業

- 日系大手商社のキエフ事務所長談(2008年12月の発言要旨):「我々はウクライナの鉄鋼大手に、半製品を中心としたスポットビジネスは危ない、設備を近代化してフラットロール製品を強化すべきだと訴えてきた。交渉努力が実って、ある大手企業に、日本の重工メーカーの圧延機械を納入する契約にこぎ着け、実施目前だった。しかし、今回の経済危機で、ウクライナ各社の設備投資計画は大幅な見直しを余儀なくされている。」
- つまり、ウクライナ鉄鋼業にとって今回の経済危機は、単に一時的な需要減や価格下落にとどまらない痛手。もし好景気があと2年くらい続いていたら、各メーカーは日本を含む先進国から設備を導入して、低い技術水準、プリミティブな生産構造から脱却できていたかもしれない。今の状況では、しばらくは現状維持が精一杯であろう。千載一遇の機会を逃し、近代化の展望が大幅に遠のいた。

ガスとの決別を迫られるウクライナ鉄鋼業

- 一般に、製鉄所の高炉生産においては、燃料および還元剤として、コークスが用いられる。しかし、ウクライナではこれまで、コークスの代わりに天然ガスを投入する製法が盛んだった。これは、天然ガスがきわめて安価でないと成り立たない製法であり、世界の主要国ではウクライナと、一部ロシアで用いられるのみであったとされる。 **ウクライナの産業構造が「安いガス」を前提としていることを象徴。**
- しかし、天然ガスの値上げを受け、見直しが急務に。2008年11月10日、ウクライナ政府と鉄鋼メーカーが危機対策・相互協力に関するメモランダムに調印。そのなかで鉄鋼メーカーが、天然ガス消費を減らしコークスにシフトすることをコミット。ティモシェンコ首相が進捗の遅れに苛立つ場面もあったが、大手各社は実際に秋頃から高炉でのガス使用を止めてコークスに切り換えつつある模様。
- 現状ではウクライナの天然ガス消費が年間750億立米、うち冶金セクターの消費量が70億立米だという。一説には、高炉の天然ガスをコークスに置き換えるだけで、冶金セクターのガス消費を半減できるという。ということは、これだけで35億立米、5%近い節約に。ただし、コークスに切り換えるのにも、それなりの投資が必要。

構造的な危機に直面する化学工業

- ウクライナにとって化学工業は、鉄鋼業に次ぐ重要な輸出産業。化学品は輸出の10%あまりをコンスタントに占めてきた。
- ただし、輸出の主力は窒素肥料であり、その原料はロシアから輸入する天然ガス。ここでも、低付加価値と、原料の輸入依存・高騰という問題に直面していることになる。ウクライナの化学企業の場合、商品の原価に占める天然ガスのコストが60～70%にも及ぶとされる。
- ガスプロムが2～3年前からウクライナ向けのガス供給価格を欧州市場並みに引き上げる動きを見せ始めたことを受け、一時ウクライナのオリガルヒたちは化学工業からの撤退も検討したとされる。ただ、この間の国際的な肥料価格の高騰は、ガス価格の値上がりを補って余りあるものだったので、撤退シナリオは遠のいていた。それが今回は、世界経済危機による需要減・価格下落と、ウクライナ向けガス供給価格の欧州価格化に同時に直面しているのだから、事態は深刻。
鉄鋼業以上に、全面的に天然ガスに依存。ガスが欧州価格になったあかつきには、一切の優位性を失い、存亡の危機に立たされることにもなりかねない。

もうひとつのパイプライン戦争？

- トリヤッチ～オデッサ・アンモニアパイプライン(世界最長)。ソ連時代にトリヤッチ工場のアンモニアをオデッサ経由で米市場に輸出するために米国の技術で建設。両国の窒素化学工場はこのパイプラインに沿って多く立地。
- ソ連崩壊後はロシアとウクライナがそれぞれの区画を保有。ウクライナ側がロシア企業向けに十分な輸送量を割り当てず、また輸送料金をたびたび引き上げていることを、ロシア側は問題視。
- パイプラインの終点に「オデッサ臨港工場」があり、ここでは窒素肥料の生産だけでなく、パイプラインで運ばれてきたアンモニアの貯蔵・積み替えも行われている。同工場は国营企業であり、2008年に民営化が試みられながら、スキャンダルを招いて中止された経緯あり。2009年の民営化リストに再掲載されたことから、その帰趨が注目される。パイプラインの終点という戦略的な位置を占めるので、ロシア企業、とりわけトリヤッチアゾトが取得に乗り出すという観測も。



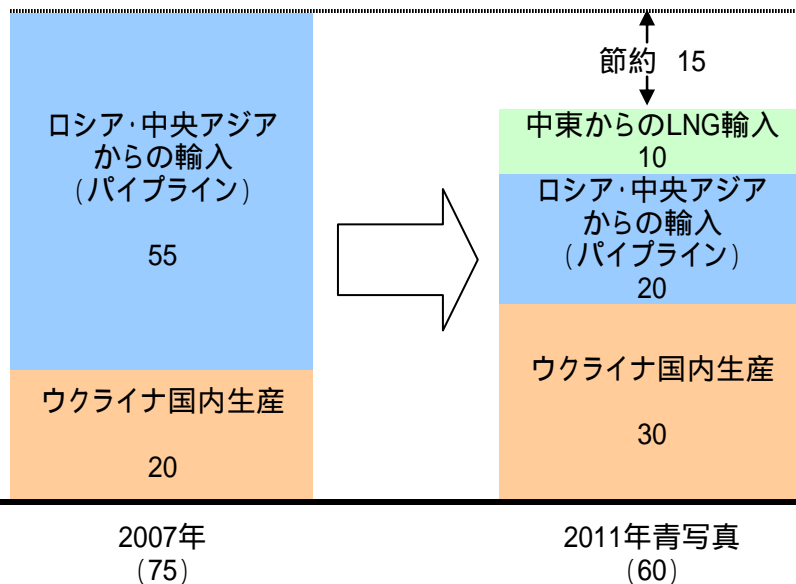
トリヤッチ～
オデッサ・
アンモニア
パイプライン



オデッサ臨港工場

ロシア・ガス依存からの脱却をめざして

ウクライナ燃料・エネルギー省が描く
天然ガスの節約・自給拡大のシナリオ
(単位:10億m³)



(出所) 『コメルサント・ウクライナ』紙(2009.1.19)をもとに作成。

- 現時点のウクライナのガス消費は年間750億立米で、内訳は市民消費190億、熱供給・公営事業190億、鋳工業380億。鋳工業の内訳は、電力120億、化学90億、冶金70億、機械45億など。
- 発電や公営事業に使っているガスを石炭や重油に切り換えると、年間100億立米のガスが節約できるという。このほか、上述の製鉄所における節約などで、4年間で150億を節約するというプラン。
- 一方、供給側では、国内生産を拡大するとともに、中東からLNGを輸入し、ロシアからの輸入を圧縮することを目論む。
- ただし、この計画を実現するためには、75億ドルの投資が必要という指摘も。

まとめ

- ウクライナ経済は、鉄鋼や化学肥料などの付加価値の低いコモディティの生産を主力とし、その品質や生産性には大いに問題がある。しかし、過去数年の中国特需、新興国ブーム、エネルギー・資源高、投機マネーの暗躍などを背景に、品位の低いウクライナ製品に対しても旺盛な世界的需要があり、ウクライナは旧態依然とした産業構造を抱えたままで高度成長を謳歌してきた。
- 世界経済危機の勃発により、ウクライナ経済の構造的な問題が露わとなり、それゆえに同国が経済危機で被った影響は世界的に見てもきわめて大きなものとなった。そして、危機の結果、構造的な問題(たとえば鉄鋼業の技術的後進性)の克服もしばらく望めなくなったという皮肉がある。
- 世界経済危機とは別の文脈で、ロシアから輸入される天然ガスが欧州市場並みに引き上げられる方向であり、いわばダブルパンチ。鉄鋼業では、天然ガスからコークスへの転換を促す形となり、結果的に近代化を促進することになるかもしれない。それに対し、化学工業のように、原料であるガスの安さをもっぱら拠り所にしてきたような産業セクターは、淘汰されることも考えられる。
- 世界経済危機にしても、ガスの値上げにしても、長い目で見れば、ウクライナ経済の構造を転換していくうえでプラスに作用するということも十分に考えられる。だが、転換を遂げるためには投資が必要であり、現在はまさにその余裕がない(IMFの緊縮指導も含め)というジレンマ。

以上